The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜紹介＞山口堯二著『助動詞史を探る』
Author(s)	小川, 志乃
Citation	語文. 2004, 83, p. 82-82
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69049
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

紹介

山口堯二著『助動詞史を探る』

小川志乃

文法史の通史的研究を目的とした氏の一連の著作『日本語疑問表現通史』（一九九〇・明治書院）『日本語接続法史論』（一九九六・和泉書院）『構文史論考』（二〇〇〇・和泉書院）に続いて、本書では助動詞についての考察がまとめられる。

本書は、第一章「「まし」の意味領域」、第二章「推量体系の史的変容」、第三章「助動詞の伝聞表示に関する通史的考察」、第四章「「べし」の通時的変化」、第五章「中世末期口語における「べし」の後身―『天草版平家物語』の訳語による―」、第六章「『天草版平家物語』の「まじい」と「まい」―原文との対照から見た打消推量の助動詞統合の歩み―」、第七章「「まい」の通時的変化」、第八章「「やうなり＞やうだ」の通時的変化」、第九章「「はずだ」の成立」、第十章「勧誘表現の通時的変化」、第十一章「完了辞・過去辞の通時的統合―「たり＞た」への収斂―」、第十二章「完了辞の統合にかかわる補助動詞の関与」、第十三章「「である」の形成」の十三章から成る。

第一章～第十章には広義推量表現に関連する論考がまとめられる。その中核となるのが、古代・中世・近現代の狭義推量辞（「話者の想像力によって事柄のありようを可能的に想定する作用を表す」（21頁）類）の調査から、推量体系の変遷について述べた第二章であろう。現実に即し、主体の想定的ムード・時制等多様な要素を反映する古代の「現実密着型」から、時制・現実との関係を解消し、主体の想定作用度による機能分担制へ再編された中世の「想像分別型」を経て、さらにムードの分極化が進行する近現代の「ムード識別型」へ推量体系が変化したことを指摘する。

第四章・第五章では、推定辞（「何らかの道理・証拠・状況などに依存しながら、事柄のありようをむしろ推定し認定する作用を表す」（22頁）類）「べし」の通史的変化について述べる。中世以降、「べし」の文語化に伴う推定体系の変化に際し、後身として推量辞「うず」が選択される。「事態の捉え方」を軸に変化した推量体系と対照的に、推定体系は対象との蓋然性を必要とし、強い融合性を保つ。「むとす」由来の「うず」は中世、推量体系が捨象しつつある対象との融合性及び、客観性を最も備えており、その点が「べし」との代替性であり、推量・推定の両体系にまたがる作用を可能にしたとする。

第十一章以降では完了辞・過去辞・断定の助動詞の統合・形成についての考察がまとめられる。第十一章の完了辞・過去辞統合の影響は、前半で述べられた推量表現にも及び、未来推量「なむ（ん）」「てむ（ん）」の衰退にも関連すると考えられる。

以上の記述は、変化は単独で完結するのではなく、他の領域と連動し、相互に影響を及ぼすことを示唆するものであろう。

本書は、語の史的変遷の平面的な追跡のみに留まらない。表現・意義・形成過程など多角的視点に立った助動詞史論と言えよう。勿論、氏の論を支えるのは、上代から現代に及ぶ豊富な用例であり、また、それらの緻密な検討が根底にあることは言うまでもない。

（二〇〇三年九月　和泉書院　三三三頁　九、〇〇〇円）

―本学大学院博士後期課程―